

『二都物語』における歴史編纂 過去の暴露と現在の再構築

History in *A Tale of Two Cities*:

Disclosure of the Past and Reconstruction of the Present

[キーワード] ディケンズ、二都物語、歴史、精神分析、時間

1 歴史小説における過去と現在

ディケンズは二つの歴史小説の題材をそれぞれ執筆時から約 60 年前の事件に求めた。その理由の一つとして、彼がスコットの『ウェイヴァリー』(*Waverley*, 1814) の副題「約 60 年前の歴史物語」 *Tis Sixty Years Since* にならば、現在と過去を隔てるのに 60 年間は十分な時間だと見なしたことが挙げられる。彼は『バーナビー・ラッジ』(*Barnaby Rudge*, 1841、以下、『ラッジ』と略記) ではゴードン暴動(1780)、そして『二都物語』(*A Tale of Two Cities*, 1859) では 1789 年に勃発したフランス革命の中でも主に恐怖時代(1793-94) という執筆年代から約 60 年前の歴史を扱っている。

歴史小説家は過去を語りながら、執筆時の状況を作品に反映させずにはいられない。ディケンズは『ラッジ』において執筆した 1830 年代と 1780 年を比較し、この間に何の改革も行っていない社会的権威の怠慢を非難している。¹ 一方の『二都物語』では、フランス革命と同規模の混乱がイギリスでも発生するのではないかという懸念を、集団に対する^{アンビヴァレンス}両価感情として表出させている。² 先輩作家のスコットも、『ウェイヴァリー』で 1745 年のジャコバイトの反乱を描きながら、その主人公をイングランドの名門貴族ウェイヴァリー一家のエドワード(Edward Waverley) とすることによって、1814 年現在、独立国ではなくイングランド辺境に甘んじているスコットランドの状況を示唆している。こうした彼らの執筆態度は、エーコによる「歴史小説とは、過去の物語を述べながら、同時に現在の問題について何事かを述べるものだ」(河島 2) という指摘のまさに傍証となるだろう。

ディケンズは歴史小説の中で、過去の描出に現在を反映させるだけでなく、過去に逆行して現在を再構築することについて考察している。例えば、『ラッジ』第 1 章で宿屋のウィレット(John Willet) が地主のヘアデイル

(Ruban Haredale) について述べる「生きてはいない。死んでもいない」という言葉に注目してみよう。これは、ヘアデイル殺害事件が未解決の懸案であって、現在から断絶された過去の出来事とは必ずしも言えないことを直接的に指している。だが『ラッジ』を再読すると、ラッジの いわれのない悪意 が引き起こしたこの事件にさかのぼって、ゴードン暴動の要因を検討しなければならないことが分かる。なぜなら、殺害事件は小説中に蔓延する いわれのない悪意 の発端であり、暴動もこのような悪意によって引き起こされたことを、ディケンズは『ラッジ』で指摘しているからである。³

セルトーによれば、歴史編纂は過去と現在の断絶を前提として行われる。一方、過去に立ち返って現在を再構築することは精神分析的な作業である。もっとも、歴史編纂の一種である歴史小説が、エーコの指摘通り、過去の問題のみならず現在の問題についても述べるものであれば、そこに述べられる過去と現在は連続していると言えよう。このような連続性を前提にするとしても、過去から現在までの空間は客観性という意図によって分割されると、セルトーは主張しているのである。要するに、現在を過去の傍らに置く歴史編纂と現在を過去の中で認知する精神分析とは互いに相容れない(セルトー 97-98)。しかし、もともと精神分析に関心を持ち、フランス革命同様の混乱が自国でも起きるかもしれないという不安を払拭できないディケンズは、歴史小説を描きながら、過去の描写に現在を表出させるだけではなく、過去に逆行して現在を見直す必要にも駆られたのだ。『二都物語』の結末部を見ると明らかなように、過去の視点に立った現在の再構築がプロットを左右している。すなわち、旧貴族のダーネイ(Charles Darnay)は、義父で医者のマネット(Alexandre Manette)によって1767年に書かれた手記を、マネットのかつての使用人ドファルジュ(Ernest Defarge)が朗読するのを聞き、そこで糾弾されているサン・テヴレモンド(St. Evrémonde)家の嫡子として、無条件に死刑宣告を受け容れてしまう。そして、マネット自身は手記の中で義理の息子に死を宣告した罪を償うために、バスチーユ監獄の囚人時代へと永続的に退行してしまう。要するに、手記が読まれたのは1793年の裁判においてだが、彼らは二人とも手記が書かれた1767年という過去にさかのぼり、その時点から見た自分の取るべき態度を選択したと考えるべきである。

2 ダーネイの自己実現における挫折

ハムレットが、父である先王の亡霊からその死の真相を聞き、自分や周囲の人々の享受する現在のあり方に疑問を抱いて苦悩するように、知られざる過去の発覚には、死者の蘇生という比喩がよく用いられる。サン・テヴレモンド侯爵による暴行事件の詳細が手記の朗読を通して暴露されることも、アンジャン・レジーム旧制度と侯爵に対する憤怒に満ちた1767年のマネットの蘇生と解釈することができる。そして、ハムレットと同様に、ダーネイも義父マネットに現在の再構築を迫られるが、義父の比喩的な蘇生は彼にとって意外な出来事として描かれていない。それは、彼が義父に加えて、実父や実父と「切り離しては考えられない」(129)⁴ 叔父の現侯爵からも、子殺し(infanticide)のモチーフを通して表現される心理的影響を受けているからである。彼は自分の存在が父なるものによって脅かされていることを知っているのだ。彼は義父に死刑宣告される以前、イギリスでスパイの嫌疑をかけられた際に、実父の分身である叔父からあらぬ噂を流され死刑になりかけている(126)。ハタチは、社会的な変革期を描く『二都物語』の基調には、このような父の息子に対する抑圧と、それに対する息子の反発という世代間の心理的葛藤がある(Hutter 448)と指摘し、特にマネットとダーネイの葛藤に注目している。

マネットはダーネイ殺しを試みるだけの葛藤を行なっている。その証拠に、彼は、ルーシー(Lucie Manette)の結婚式の日、ダーネイから素性を明かされた直後に、娘との再会後のすべての記憶を9日間に渡って失い、バスチーユの囚人時代の習慣である靴作りを再開させている(202-05)。このような精神状態に陥った要因の一つは、サン・テヴレモンド家の人間の出現と彼の幸福な家庭生活の崩壊とが彼にとって表裏一体の関係にあることだ。正気を取り戻した彼自身が「最も思い出したくない連想が強烈な鮮明さで生き返ってきた」(209)ためだと分析している通りである。もう一つの要因として、彼が再会した娘を妻と取り違えた(47)時以来、ルーシーは彼の代理の妻として、幸福な家庭生活を彼に提供してきたことが挙げられる。すなわち、マネットはルーシーの代理の夫として、ダーネイに敵意を抱いたことになる。それでも、彼は娘の幸せな結婚生活を保障するために、バスチーユ時代に一

時的に回帰するという葛藤の末、父親として再生する。しかし、彼がサン・テヴレモンド家に対する怨恨を過去の遺物として葬り去ることはできないことが、1793年の裁判で暴露されるのである。

一方、ダーネイは、叔父には反発しているものの、義父に対して従順である。ルーシーに求婚するに際してマネットの許しを請う時も、彼はルーシーの夫になるというよりも、マネットの養子になることを意図している。

I look only to sharing your fortunes, sharing your life and home, and being faithful to you to the death. Not to divide with Lucie her privilege as your child, companion, and friend; but to come in aid of it, and bind her closer to you, if such a thing can be. (139)

このようなダーネイの態度は、一つには、フロイトが「家族ロマンス」(family romance)という要語を用いて定義した自立期の少年像 家族イメージと家族内葛藤を通して、社会秩序における自分の位置を模索する少年像 を思わせる。⁵ なぜなら、父と叔父を嫌悪するダーネイは、マネットを父とすることによって、侯爵家から個人的に解放されるだけでなく、封建領主としての社会的地位からも解放されることを望んでいるからである。その証拠に、彼は「この恐ろしい制度に縛り付けられ、その責任だけは取られて何一つ実権がない」(129)と我が身を嘆いている。「制度」が旧制度を指し、彼が血筋によってそれに結び付けられていることは言うまでもない。

ダーネイのマネットに対する従順さは、二つ目として、フロイトが『トテムとタブー』(Totem and Taboo, 1913)で定義した抑圧された青年像も思わせる。なぜなら、彼は「死ぬまであなたに忠実でありたい」(139)と述べることによって、家父長としての義父マネットの権威を自分が侵さないこと、換言すれば、父親代わりのトテム動物を殺すというタブーを侵さないことを宣誓していると解釈できるからである。ダーネイが義父の権威を侵さないよう慎重にならざるをえない理由として、彼がサン・テヴレモンド侯爵殺害の真犯人を代理に立て、彼にとって文字通りの父親代わりの叔父に対し、深層心理の領域で復讐を果たしていることが挙げられる。このようなダーネイ

の代理殺人は、『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-61)におけるピップ(Pip)のそれと類似している。なぜなら、熟練労働者オーリック(Dolge Orlick)の言葉を借りれば、ピップはオーリックを代理に立てて姉ミセス・ジョー(Mrs Joe Gargery)に復讐しているからである。実際に手を下したオーリックは、ミセス・ジョーからピップが「可愛がられて、俺は虐められて殴られた」(第53章)とピップに訴えながら、実際には「虐められ殴られた」ピップの姉に対する憎悪を仄めかしている。モイナハンが指摘するように、オーリックはピップの行動パターンを辿るかのように行動し、彼の分身としての側面を十分に示唆している(Moynahan 64-67)。それと同じように、侯爵殺害当日の真犯人とダーネイの行動パターンも酷似している。前者が我が子を轢き殺した侯爵への怒りを「死んだ」(114)という一言に込めた直後に、後者は叔父を訪問し、自分を子殺ししようとした叔父を叱責している(126)。そして、真犯人はダーネイが通ったのとほぼ同じ道筋を辿って屋敷に到着し(120)、侯爵殺害に至っている。さらには、侯爵殺害直後の足取りが明らかでないことも、両者の共通点として挙げることができる。

三つ目として、ダーネイは『トーテムとタブー』におけるもう一つのタブーである「父の死により解放された女性たちを自分たち兄弟のものにする」タブーを侵さないことも誓っている。この誓いは、彼がルーシーに求婚する許可をマネットに請う言葉の中で、マネットの「伴侶」(139)すなわち代理の妻としての彼女の特権を尊重すると明言するくだりに表れている。ここで想起すべきは、ディケンズの当初の構想において、サン・テヴレモンド侯爵はマダム・ドファルジュ(Thérèse Defarge)の姉を強姦したのではなく、結婚の意思があると偽って誘惑していた(*Companion* 156-57)ことである。彼女が姉の代役としてサン・テヴレモンド家への復讐を果たそうとしていることを考慮するなら、ディケンズはルーシーとマダム・ドファルジュの分身関係を念頭に置いていたと想定される。この構想が変更されても、『二都物語』の扉絵において、前者の紡ぐ糸と後者の編む糸が一本に繋がっていることをかんがみれば、やはり彼女たちは分身関係にあると判断できる。したがって、ダーネイは、ルーシーに求婚することによって、実父がマダム・ドファルジュの姉に対して犯したのと同じ過ちを自分も犯すのではないかと危惧

し、第二のタブーを侵さない誓いを立てたと解釈できるのである。以上の三つの理由により、ダーネイは義父の権威を侵さないよう慎重にならざるをえないのだ。

ダーネイが実父や叔父に反発し理想的な父親としてマネットを慕う素地を築いたのは、彼の亡き母である。彼女は夫が犯した罪を幼い息子に対して彼自身の罪として背負わせている(129)。この重荷によって精神的に抑圧された結果が、タブーを侵してしまうことへのダーネイの過度の不安感として表れている。さらに彼女はマネットの手記の朗読に伴い比喩的に蘇生すると、父の罪を代わりに償うという誓いを再度息子に立てさせる(343)。ダーネイにとって死刑宣告受諾は、理想の父親の探求における諦念としてのみならず、母に対する宣誓の証としても解釈することができる。

「家族ロマンス」において家庭内葛藤と社会における自己認識が直結しているように、ダーネイの自己実現の失敗は家庭内に留まらない。彼は、その適性を明示されているにも関わらず、社会的に活躍できない。すなわち、ディケンズは、来るべき19世紀の帝国主義国家イギリスのあり方を予感させる『ラッジ』のチェスター(Edward Chester)に相当する人物として、ダーネイを描いた。両者には、父親に対する嫌悪感から貴族としての家名を捨て、外国に渡ることによって新たな生き方を模索するという共通点がある。⁶ しかも、ディケンズは「人権宣言」起草に関与した政治家で軍人のラファイエット侯爵とダーネイの共通性も示唆している。前者はアメリカ独立戦争に参戦し、後者は「ジョージ三世よりもジョージ・ワシントンの方が後世に名を残す」(75)と発言することによって、共にアメリカ独立を支持している。しかし、エドワードが西インド諸島における^{プランテーション}農園経営成功後に一時帰国して暴動鎮圧に尽力し、そして、ラファイエット侯爵がジャコバン派に忌まれての亡命後に帰国して七月革命で国民軍司令官として大役を果たしたのと対照的に、ダーネイは故国の秩序回復に貢献することができない。

サンダーズが、ディケンズは歴史的な事項に言及しても、それは個人が巻き込まれた背景を提供しているだけであって、変革期の状況分析に頓着しているわけではないと指摘している(*Historical Novel* 72)。しかし、ダーネイの人生を啓蒙主義的な青年貴族の挫折の物語と見なすなら、ディケンズは背

景として歴史を描いたのではなく、歴史の背景として人物の家庭内での葛藤を挙げていると考えられるのではないだろうか。なぜなら、ダーネイの父への反発は、自分が属する階級や階級制度が生み出した惨劇への嫌悪感だと解釈できるからである。さらに言えば、ディケンズは故国の秩序を回復する適性ある彼を挫折させることによって、革命後の秩序回復の遅れという社会問題に対する家庭内葛藤の影響を示唆していると思なすことも可能であろう。

3. 歴史編纂

1789年のバスチーユ監獄襲撃時に手記を発見し、その後の数年間それを隠し持っていたのは、ドファルジュ夫妻である。彼らは、1793年の裁判で手記を公表することによってダーネイに死刑宣告を受諾させ、サン・テヴレモンド家への個人的な恨みを晴らすのみならず、すべての聴衆に衝撃を与える必要があった。なぜなら、革命家の彼らは、旧制度下の悪政が招いた惨劇を人々に知らしめ、共和国の建設を正当化しなければならなかったからだ。換言すれば、暴行事件が起きた1757年以降の事の次第を時系列に沿って理解している彼らは、事実を繋ぎ合わせるためではなく、旧制度下の支配階級全般を糾弾するために、共和主義者が歩んだ歴史の正当性を印象づける資料として、手記を必要としたのである。彼らの標的がサン・テヴレモンド家に限定されないことは、彼らの敵に着せる「^{きょうかたびら}経帷子」(shrouds)に相当するマダム・ドファルジュの編み物が、ブルボン王制密偵時代のバーサッド(John Barsad, aka Solomon Pross)をはじめ、すべての革命の敵の名前を記録の対象としている(184)ことによって示唆されている。

ドファルジュ夫妻が手記を公表する場として1793年の裁判を選んだのは、バスチーユ監獄襲撃後にうがたれる時間の断絶——王制という過去と共和制という現在を隔てる断絶——によって、手記が公表の場を獲得するだけでなく、その重要性に変化が生じることを意識していたためである。断絶がうがたれる前は支配者の横暴を示す一例に過ぎなかった手記が、革命後は共和国誕生の必然性を証明する根拠になる。それに伴い、ドファルジュ夫妻は、敵の名前の記録者もしくは資料収集者から、人々に共和国の正当性を印象づける歴史編纂者に変貌するのだ。歴史が過去と現在の断絶を前提として編纂

されることは、既に述べた通りである。もっとも、ディケンズは共和主義者の歴史編纂方法を肯定していない。なぜなら、彼らの考える偽善的な「友愛」の定義（David 145）と同様に、その方法には編纂者だけの都合に合わせた偏狭さが見出せるからである。例えば、彼らの歴史は、サン・テヴレモンドー門を 1767 年に告発したマネットが、1785 年にその嫡子を娘婿として迎えたこと、すなわち、旧制度下の圧政者と被圧政者の間に歩み寄りの歴史が見られることを完全に無視している。さらに、彼らは恐怖政治下における共和主義者の横暴を無視して、旧制度下における貴族の専制だけを歴史に留めようとしている。

ディケンズは共和主義者だけが歴史編纂における恣意性に陥ると指摘しているのだろうか。いや、そう考えるべきではない。彼は、フーコーの言う「人間主義」(*humanisme*) 的な歴史——自分の生きてきた道程を正当化するために現在を最高到達点として描かれた歴史——を編纂しがちだと考えたのではないか。ただし、ディケンズがとりわけ為政者にこの傾向があると見なして、読者の警戒心を鼓舞していると解釈することもできる。というのは、ディケンズにとって、為政者が自己正当化の歴史を作り上げるのは、身近な問題であったからだ。歴史家であり政治家でもあったマコーリー（Thomas Macaulay）は『英国史』(*The History of England, 1848-61*) の第 1 章において、イギリスが名誉革命以来より高次の立憲君主制を目指して推移し、執筆時であるヴィクトリア朝中期にそれが頂点に達しているとする直線的な歴史観を提示した。この中でマコーリーは「進化」(*progress*) という特定の見方を採用したために、それに反する歴史の可能性をすべて排除したと考えられる。⁷ マコーリーに反発するかのよう、ディケンズは『英国史物語』(*A Child's History of England, 1851-53*) において、一般に英雄視されている人物の邪悪な側面を強調した歴史を展開する。例えば第 4 章で、悪魔の誘惑にも惑わされない聖人として伝承童謡に登場する^{ナスリー・ライム}カンタベリー大司教の聖ダンスタン（Saint Dunstan, ?-988）を、虚言癖のある悪漢として描いている。

直線的な歴史観への反発はディケンズの歴史観の一部であった。彼は恐怖政治に嫌悪感を覚えていた（Gorniak 26）ので、共和主義者を批判する方策の一つとして、彼らが自分たちの都合に合わせた歴史を編纂する様子を『二

都物語』に描き込んだのである。そんな彼らの恣意性は、ドファルジュ夫妻が、自分たちは現在と過去の断絶を利用して歴史編纂をする一方で、マネットとダーネイには過去を現在から遮断させないことにも表れている。マネットとダーネイの二人は、1757年における暴行事件や1767年における罪の告発を過去の出来事として現在から断絶させることを許されず、その時点に立ち返って現在の再構築を迫られるのである。この点を考慮するなら、彼らはフランス革命という歴史的事件によってというよりはむしろ、共和主義者による恣意的な歴史編纂の過程と個人的な怨恨の情によって翻弄されたと言うべきであろう。そして、ディケンズはそんな彼らの姿を描くことを通して、歴史編纂と精神分析という本来なら相容れないはずの二つの要素を小説の中で融合させようとしているのである。

注

1. 矢次「変化と不変」(4-5)を参照。
2. 矢次「カーニヴァル」(10-11)を参照。
3. ディケンズは『ラッジ』序文(1841)の中で、ゴードン暴動を「宗教暴動と誤って呼ばれる事件」 what we falsely call a religious cry だと指摘している。白痴の青年バーナビーが いわれのない悪意 から殺人を犯した父と酷似していること、父の代理として暴動に参加したことについては、矢次「変化と不変」(9)を参照。
4. 『二都物語』からの引用は、下の引用文献に挙げるペンギン版から。
5. 本稿で用いる「家族ロマンス」はフロイトの原義を踏襲しているが、ハントはその原義から離れ、革命家たちが「政治的な世界を描き直し、家父長的な権威から引き離された政治形態を心に描くための創造的な努力」(Hunt xiv)を辿るべく、「家族ロマンス」という要語を用いている。
6. ディケンズは、ブルワー＝リットン宛ての書簡で、侯爵とダーネイについて「貴族が古い考えと結託し、過ぎ行く時代を象徴する一方で、その甥が来るべき時代を象徴する」(Letters 9: 259)と述べている。
7. サンダーズは、ディケンズが「人間は死と再生を繰り返す可能性がある」と考えたこと、すなわち、ディケンズが歴史に循環する可能性を見

出したことを指摘している (*Historical Novel* 72)。

引用文献

David, Marcel. *Fraternité et Révolution Française 1789-1799*. Paris: Aubier, 1987.

Dickens, Charles. *Barnaby Rudge*. 1841; Harmondsworth: Penguin, 2003.

---. *Great Expectations*. 1860; Harmondsworth: Penguin, 1985.

---. *Master Humphrey's Clock and A Child's History of England*. 1840-41, 1851-53; Oxford: Oxford UP, 1998.

---. *A Tale of Two Cities*. 1859; Harmondsworth: Penguin, 2003.

Gorniak, George. The English Revolution. *The Dickens Magazine*. 3.4 (2005): 26-28.

Hunt, Lynn. *The Family Romance of the French Revolution*. Berkeley: U of California P, 1992.

Hutter, Albert D. Nation and Generation in *A Tale of Two Cities*. *PMLA* 93 (1978): 448-62.

Mynahan, Julian. The Hero's Guilt: The Case of *Great Expectations*. *Essays in Criticism*. 10 (1960): 60-79.

Sanders, Andrew. *The Companion to A Tale of Two Cities*. London: Unwin Hyman, 1988.

---. *The Victorian Historical Novel, 1840-1880*. New York: Palgrave, 1978.

Storey, Graham, ed. *The Letters of Charles Dickens*. Vol.9. Oxford: Clarendon, 1997.

河島英昭「ウンベルト・エーコ氏のこと」『朝日新聞』1990年10月2日号。
セルトー、ミシェル・ド『歴史と精神分析 科学と虚構の間で』内藤雅文
訳、法政大学出版局、2003。

矢次綾「『二都物語』におけるカーニヴァル 革命空間における集団と個人」『中部英文学』26 (2007): 2-14。

---。「『バーナビー・ラッジ』における変化と不変 歴史小説家としてのディケンズ」『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』28 (2005): 3-14。

History in *A Tale of Two Cities*:

Disclosure of the Past and Reconstruction of the Present

In *A Tale of Two Cities*, Dickens merges psychoanalysis into history. Psychoanalysis and history are contradictory in themselves, because, according to Certeau, psycho-analysis reconstructs the present by inducing people to retrace the past and to reconfirm the connection between the past and the present while history presupposes that the present is divided from the past.

Dickens induces Manette and Darnay to psychologically go back to the past and reconsider what to do in the present. When the accusation written by Manette in 1767 is read out at the trial in 1793, Darnay is led to accept the death sentence to atone for the crime committed by his father and Manette regresses into his past to punish himself, who gave the death penalty to his son-in-law.

Mr and Mrs Defarge have kept Manette's writing since 1789 and publish it at the trial. They, as well as having their personal revenge on the St. Evrémonts by condemning Darnay to death, try to shock the whole audience, because they as revolutionists need to justify the construction of the republic by adducing St. Evrémont's assault on the common people as an example of the misgovernment under the *ancien régime*. In doing so, they force Manette and Darnay to recognize that their past is not broken from the present, contradictorily taking advantage of the break between the past and the present brought about by the revolution, which carved out the present of the republic by ending the past ruled by the *ancien régime*. Without the break, they could not testify in court and justify themselves as revolutionists. Dickens, in describing Mr and Mrs Defarge's way of connecting and disconnecting the past with the present, builds psycho-analytic elements into a historical novel.

以上は、『中国四国英文学研究』第4号掲載論文を転載したものである。